

江戸後期の羽織に関する一考察

A Study of Haori in the Latter Half of the Edo Period

本 間 小 枝 子

Saeko Homma

Summary

Nagagi and Haori are the main items in Japanese dress. As I guessed that Haori has gone through some changes in the latter half of the Edo Period and has moved to the Meiji Era, I traced its changes based on Tachihon which was issued after the 18th century.

As a result, I found that in its form Haori of one piece lining had decreased and Haori with a hem had become common, that in cutting, the cloth had been cut in such a way as to minimize scraps, that neckband had become wider and that the gusset had become smaller and rectangular.

I はじめに

日頃和服構成の指導に携わる立場から、和服裁縫の技法がどのように伝えられて、今日の状況にまで変化してきたものであるかを究明したいと考えた。

これまで裁本に関する研究報告⁽¹⁾、18世紀の着尺（長着）についての報文はあるが⁽²⁾、羽織については見当たらないので、まず、江戸時代後半の羽織を裁本を中心に調べてみたので報告する。

羽織は室町時代の末から江戸時代初期にかけて着用された道服から変化したものという説が最も強調されているが、まだ定説はない。それは、衣類の宿命として着用の結果消耗するものであり、傷んだ部分を除いて別途の物に仕立直されるなどの理由で、確実な実物が残らないためである。

そこで『家政学文献集』⁽³⁾に収録されている三種の裁本から羽織の実情に近づこうとした。

裁本というのは江戸時代を通じて刊行された、衣服の裁ち方を図解した参考書である。現存するものの最も古いものは元禄3年京都で刊行された『裁物秘伝抄』で、その他に11種程が知られている。それらの多くは京都で出版されたが、江戸時代も後半になると江戸でも出版されるようになる。

裁本の多くは、仕立職人でも文字の読める師匠級を対象に書かれたもののように、衣服の寸法や細かい説明はついていない。おそらく衣服各部の寸法や必要な縫い代などは、仕立職人の常識となっていたものと考えられる。

このたび筆者が採りあげた裁本は下記の三種である。

『万金産業袋』 享保17年（1732）京都蒼屋

『絹布裁要』 宝歴14年（1764）正木政幹 京都

『裁縫早手引』 享和3年（1803）上原素白著 江戸萬笈堂

万金産業袋以前の状況については岡野氏論文を参考にさせて頂き、明治初期のことは同10年ごろの裁縫教授書^{(4)~(8)}を参考にした。

Ⅱ 考 察

1. 羽織の種類

今日では袷羽織といえば、表布が裾で折り返って内側で胴裏に続くのが定形であるが、裁本では無双とか通し裏という名称が目につく。これらを身頃の構造によって整理分類すると次のようである。また3種の裁本及び明治初期の参考文献の記載する羽織の種類は表1のようである。

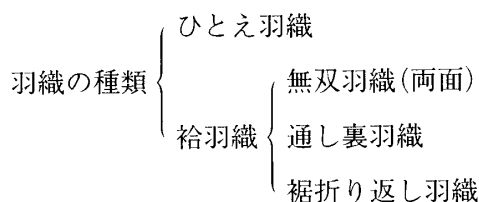


表1 資料にみる羽織の種類

| 文献名 刊行年 種類 | 万金産業袋 享保17年 1732 | 絹布裁要 宝歴14年 1764 | 裁縫早手引 享和3年 1803 | 裁縫独稽古 明治10年 1877 | 久保田梁山 裁縫教授書 明治11年 1878 | 渡辺辰五郎 裁縫教授書 明治13年 1880 | 樋口米子 裁縫教授書 明治25年 1892 | 岩瀬松子 裁縫道しるべ 明治32年 1899 |
|------------------|------------------------|-----------------------|-----------------------|------------------------|---------------------------------|---------------------------------|--------------------------------|---------------------------------|
| ひとえ羽織 | 1 | | 2 | | | 3 | 3 | 1 |
| 無双羽織 (両面) | | 2 | 2 | | | | | |
| 通し裏羽織 | 4 | 21 | 4 | 5 | | 2 | | |
| 裾折り返し 羽織 | | 2 | 17 | 2 | 1 | 3 | 3 | 4 |
| 合計例数 | 5 | 25 | 25 | 7 | 1 | 8 | 6 | 5 |

(1) ひとえ羽織

今日のひとえ羽織と殆んど同じであるが、裁ち切りの身たけから推して、裾の折り代は少なかったようである（図1—a, 図2—a）。

(2) 無双羽織（両面）

無双または両面羽織は表裏すべて同一生地を用いるもので、布遣いに図1のb, c, dの三つ

の型がある。bは後裾がわなで、前裾で縫い合わせる形式である。絹布裁要16丁（図1—b, 図2—b）の例がそれである。cは後裾をわなにして肩で前後の裏を接ぎ合わせる形式である。この場合前身頃の裏は裾で折り返すのではなく、用布の他の部分で裁ち出した布を前裏としている（図1—c, 図2—c）。dは前裾も後裾も縫い合わせる形である（図1—d, 図2—d）。この場合裏側を別の裏地にすれば通し裏の袷羽織ということになる。

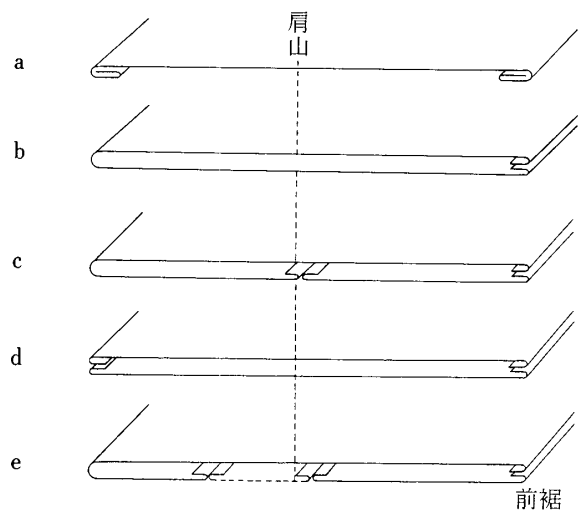


図1 羽織の身頃の布遣い

羽織の場合、両面羽織といってもリバーシブルではなく、裏返して着ることはない。

(3) 通し裏羽織

今日、戦国・桃山時代からの伝世品の立派な道服の類が羽織の基になっているとすれば、通し裏が羽織の初期の構造であったことはうなずける。道服は身頃も通し裏で裾で縫い合わせて、毛抜き合わせに仕立ててある。筆者が以前京都国立博物館で見た古風な羽織は四代將軍徳川家綱（1624～80）の少年期の羽織（興聖院蔵）であった。その時陳列ケースの外から観察したメモによると、たけはやや短かめながら表は紺色の繻珍様の生地、裏は錆朱の紋織地で裾は毛抜き合わせに仕立てられている。袖口と振りに裏地の錆朱の生地のふき襷がたっぷり出ており、襷幅が広く前下りが急傾斜で衿幅が10センチメートル程に見えた。

通し裏の羽織は明治の初めまではあったとのこと（『和裁のふきだまり⁽⁹⁾』より）であるが、明治13年刊行の『普通裁縫教授書』に2例を見ることができ、その後の裁縫書にはとりあげられていない（表1）。

(4) 裾折り返し羽織

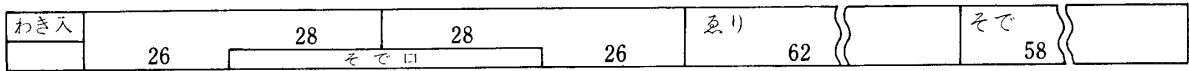
今日の袷羽織と外見は同様の布遣いであるが、前裏の裾は表と一つづきではない。図1—e, 図2—eに見るように他で裁ち出した部分をこれに充てている。

2. 裁ち方の推移

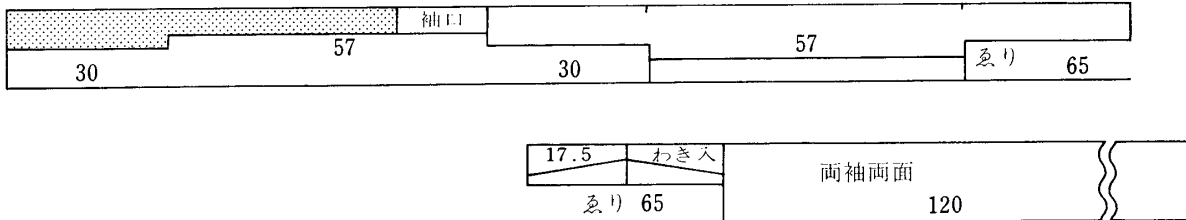
布幅が現代のように規格化されていなかった時代には、貴重な布地をそれぞれの布幅に合わせて無駄なく、間違いなく裁つためには参考書としての裁本の必要性は大きかったことは察せられる。

以下に三資料によって裁ち方の推移を見る。

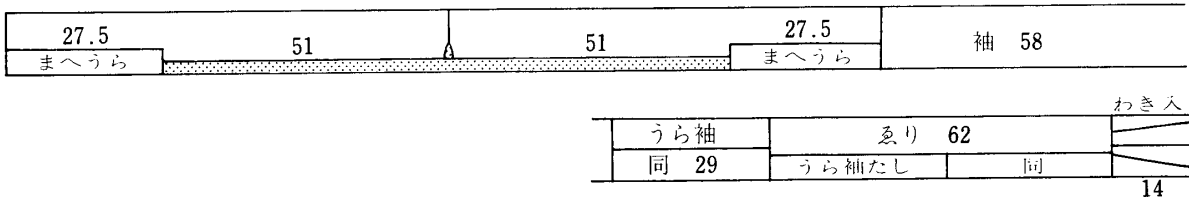
a 裁縫早手引 27丁 ひとえ羽織 (常巾)



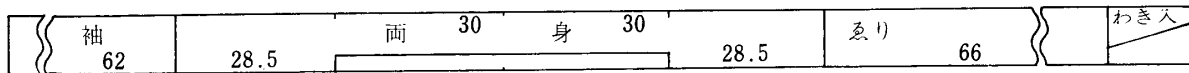
b 絹布裁要 16丁 1尺4寸巾 両面羽織



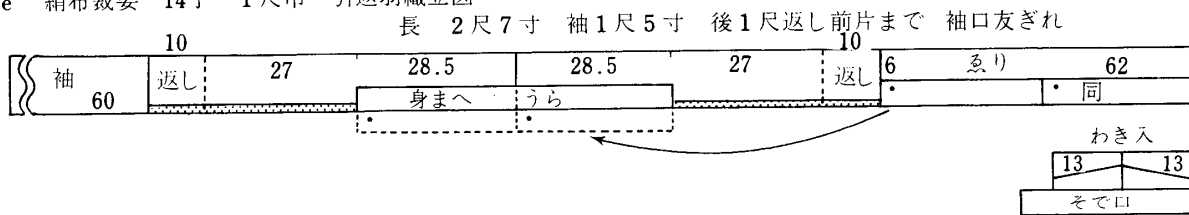
c 裁縫早手引 36丁 本八丈両面袷羽折



d 絹布裁要 10丁 一巾物 羽織表 長2尺8寸5 袖1尺5寸5 前下り1寸5分



e 絹布裁要 14丁 1尺巾 引返羽織立図



f 明治13年 裁縫教授書 卷三 24丁 常巾単羽織角襦裁方

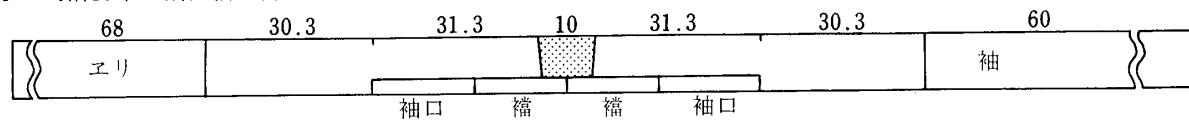


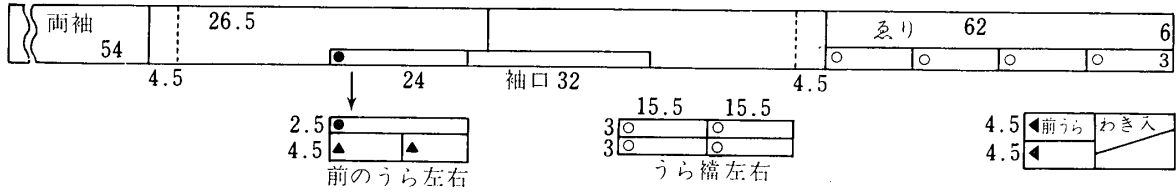
図2 羽織の裁ち方図 其の一 (ひとえ羽織)

万金産業袋では、産業百科事典的内容の一部であるため、裁ち方については数ページをさくのみである。そのうち羽織表の裁ち方は5例、羽織裏の裁ち方が6例である。羽織表は1尺5寸幅の場合は背違裁、二幅物・三幅物では一つ身裁ちであって、いずれも裁ち出し切れが出る。但し、これには寸法の指示が皆無である。

a 絹布裁要 10丁 一巾物 裾引返し羽織立図

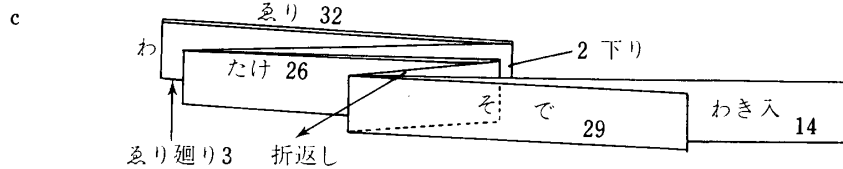
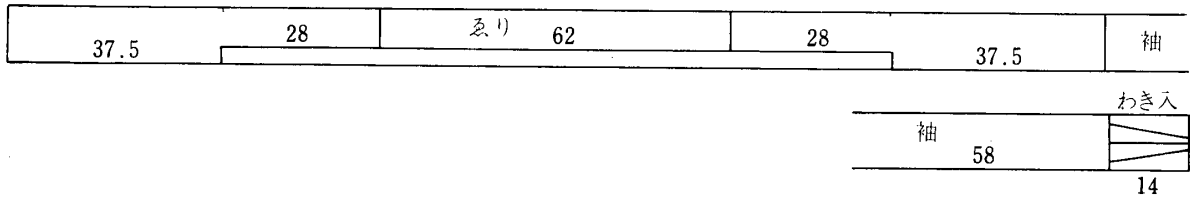
長 2尺6寸5 前下り 1寸5 袖口友ぎれ

袖 1尺3寸5 後返し4寸5 前返し1尺2寸5



b 裁縫早手引 28丁 つねはば 折返し羽織 たけ 2尺6寸

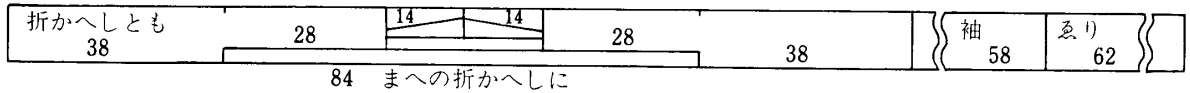
そで 1尺4寸5



bの積り方図

d 裁縫早手引 30丁 常巾 折返羽織 たけ 2尺6寸

そで 1尺4寸



e 裁縫教授書 卷三 25丁 常巾 2丈8尺1寸ヲ以テ裕羽織ノ表裁方

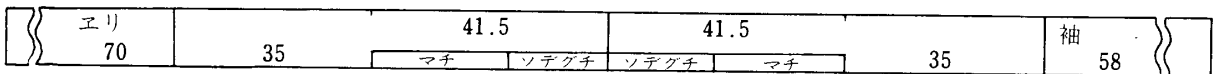


図3 羽織の裁ち方図 其二 (裕羽織)

絹布裁要では、これ以前の裁本に比べてわかり易く整理されていて、目録にも

第一 一巾物裁図

第二 一尺二寸より四寸迄裁図

第三 一尺五寸より六寸迄裁図

第四 二巾物裁図

第五 三巾物裁図

とあるように、布幅別にまとめている。すなわち、第一の一巾物は常巾（9寸～9寸5分）で、

ほぼ今日の裁ち方に近づいている。第二のグループは前衿裁・前袖裁，第三は背違裁と前袖裁，第四は一つ身裁が多い。第五の三巾物になると，羽織三着，羽織と着尺，着尺と羽織と袴，羽織と袴，袴と羽織といった裁ち合わせで，裁ち方は上述の形式のすべてが応用されている。余談であるが，当時は長着・羽織・袴・袴が同じ素材で仕立てられる場合もあることがわかる。

裁縫早手引では布巾より地質名をあげて，常巾から次第に巾広い布の裁ち方へと並べてある。唐棧・八丈・紗綾・ちりめん等といえば，その布巾もほぼ決っていて，呉服屋，仕立職，消費者の間で共通理解があったことがわかる。

裁縫早手引では一巾物の裁ち方例が7例に増えて，さらに基本的な折り積りの図（図3—c）も載せている。裁ち方も一層工夫されて，裁ち出し切れ（残り布）もごく少なくなっている。

(1) 常幅のひとえ羽織の裁ち方の推移

絹布裁要にはひとえ羽織がないので，通し裏の羽織の表の裁ち方をひとえ羽織と見ることにし，裁縫早手引では27丁の裁ち図をとりあげてみる。前者は図2—d，後者は図2—aである。

絹布裁要dも裁縫早手引aも衿布は一幅を用いている。襦はd, aとも大変広く，殊にaでは例の少ない長方形である。

なお，aには次のような衿肩明についての添え書きがある。

「ゑり肩大方二寸八分 しかし肥まんにてゑりふときには三寸 但し巾一尺もある時はゑり肩四寸又は三寸八分おとし此内にてわき入袖口をとるなり 何れも背にて右ゑりかたの割合にてぬひ込なり」

a および d と比較のために明治13年刊行の裁縫教授書⁽⁶⁾をみると図2—fのように変化している。最も大きな違いは裾の折り代がd, aに比べて充分用意されていることで，このために絹のような薄物でも裾に重さを増して，着装時の落ちつきがよい。また残り布を用意して，前身頃の落としから袖口布および襦を十分とることができるようにしている。この裁ち方は今もひとえ羽織の定型である。

(2) 裾折り返し羽織の裁ち方

図3—aは絹布裁要の初出の裾引返しの立図で，bは裁縫早手引の初出の例である。a, bとも折り返しは後のみで，前裏は共に他から裁ち出した部分を接いで作っている。aでは合形図が示すように，bでは指示がないが幅2寸8分，長さ1丈1尺8寸の裁ち落しを，おそらく6等分し，幅2寸8分，たけ1尺9寸余りの布3枚を接いで前裏に作るのであろう。

この裁ち方図には図3—cの折り積り図が添えられていて，大変わかりやすい方法である。

ここでも絹布裁要・裁縫早手引の次の動向をみるために，明治13年の教授書から基本的な例（図3—e）をみると，前身頃の裏は後同様に折り返えすようになり，しかも胴接ぎ^はの位置を前後揃えるとか，前の折り返しの高さは乳（羽織紐通し）の位置より1～2寸下が見好いといった習慣も定着している。

3. 袖口布

今日では羽織の袖口の内側には表の生地で袖口をつけるのが普通であるが、裁本には袖口布をあまり見かけない。

江戸時代初期には覆輪といって、丈夫な布または華麗な布で袖口等を細く縁取ることが流行したようである。後の手の入っていない実物資料が現存しないのでわからないが羽織の袖口にも覆輪をかけたことは想像される。

また、前述した四代将軍の羽織のように裏を袖口にふき出す形式もあったのであるから、袖口布をつけない仕立てが行われることはありうることである。

絹布裁要10丁目の裁ち図(図3—a)には袖口友ぎれとわざわざことわっている程で、裁ち図に袖口布の入っているもの5例、残りぎれが十分あるのに袖口布のないもの5例、残りぎれに袖口布にするだけの余裕のないもの8例である。

裁縫早手引では袖口布のあるもの3例、残り布が充分あっても袖口布にしてないものが1例、他はすべて袖口布なしである。今日ならば袖口布と襷布に用いる前落しの部分は殆んど前身頃の裏布に用いている。この時代の裁ち方で袖口布を表地からとらない理由の一つは袖口布用の黒八丈、五日市の類(約幅9cm、たけ70cm)が袖口布として単独に売られていたためかもしれない。今後は流通面からの調査が必要である。





4. 襷布の形状

裁本ではいずれも脇入・ワキ入と称しているが襷のことである。

男物羽織の襷は各時代を通して三角形であったが、その用布を裁つについては時代の変化がみられるのは興味深い。万金産業袋ではいずれも二等辺三角であったが(図4)、絹布裁要では一つ身裁ちの前落し、幅5寸6分ないしは6寸の布を袖口と指定している4例がある。それをどのように分割するかの指示はないが、いずれも表裏、左右の襷とするには十分な用尺である。

裁縫早手引になると、常巾ひとえ羽織(図2—a)に初めて角襷が出ている。角襷の中は常巾

表2 資料に現われた襷布の形状

| | 文献名 | 万金産業袋 | 絹布裁要 | 裁縫早手引 | 裁縫独精古 | 裁縫教授書 | 裁縫教授書 | 裁縫教授書 | 裁縫道しるべ |
|---|-----|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| | 刊行年 | 1732 | 1764 | 1803 | 1877 | 1878 | 1880 | 1892 | 1899 |
| 三角襷  | | 1(2) | | | | | | | |
| 柳裁襷  | | 4(4) | 21 | 18 | | | | | |
| 角襷  | | | 4 | 7 | 7 | 1 | 7 | 5 | 5 |
| 鈎襷  | | | | | | | 1 | 1 | |
| 合計例数 | | 5(6)※ | 25 | 25 | 7 | 1 | 8 | 6 | 5 |

※()内は羽織裏の裁ち方例数

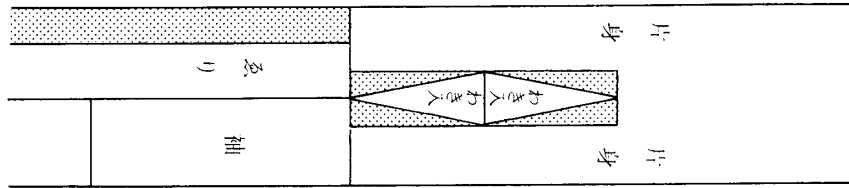


図4 三角襷の裁ち方例（万金産業袋巻之五11丁）

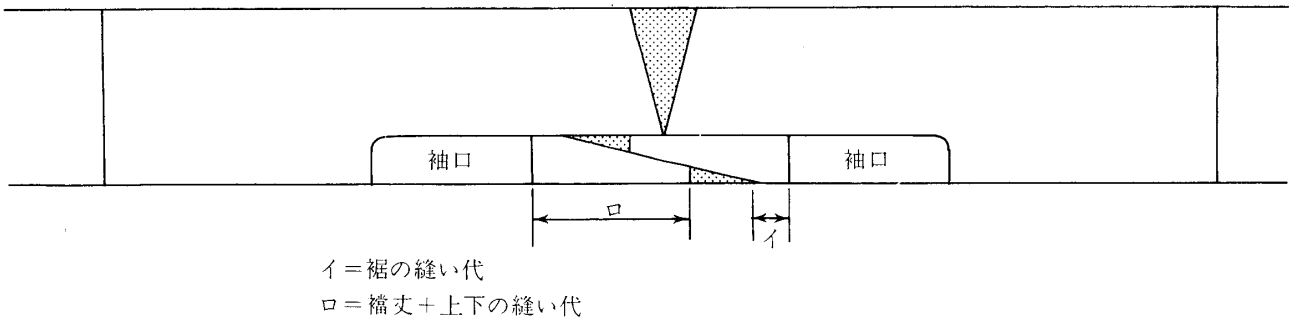


図5 現代の鉤襷の裁ち方

を二分したものであるから4.5寸である。39丁紗綾羽織総うらの裁図も同様である。また終りに近い66丁の唐棧留羽織表裁図では巾3寸だけ1尺2寸5分の角襷が現われる。

なお、裁本ではいずれの袷羽織でも、袖口布をとらずに襷を表裏4枚とっているのは、今日の視点からは理解しにくい。

絹布裁要、裁縫早手引とも柳裁襷は9寸から5寸までの巾を裁ち合わせているが、それらは寸法の指示がないので正確なところはわからないが、図からの推察では襷の下幅は6～4寸、上の幅が3～1寸ぐらいと考えられる。それにしても現在の形から考えると非常に広いものである。

これが明治のはじめになると2寸8分から2寸5分が普通で、おそらく女物であろうが2寸という狭いものも現われる。また前出の明治13年の裁縫教授書を見ると、前身頃の裁ち落しの幅2寸8分ないし3寸を用いるのが裁ち方の標準になったようで、襷の形も8例中7例は角襷である。ひとえ羽織で用尺が少ない1例では特に鉤襷にする旨をわざわざことわっている。そしてこの頃は襷の仕上幅2寸が定着している。

5. 身たけ・前下りおよび繰り越し

裁本をみて不審に思う事項の一つに身たけがある。

裁ち図の中に羽織たけを例えば2尺6寸と指示してあると、裁ち切り図の寸法が2尺6寸と記

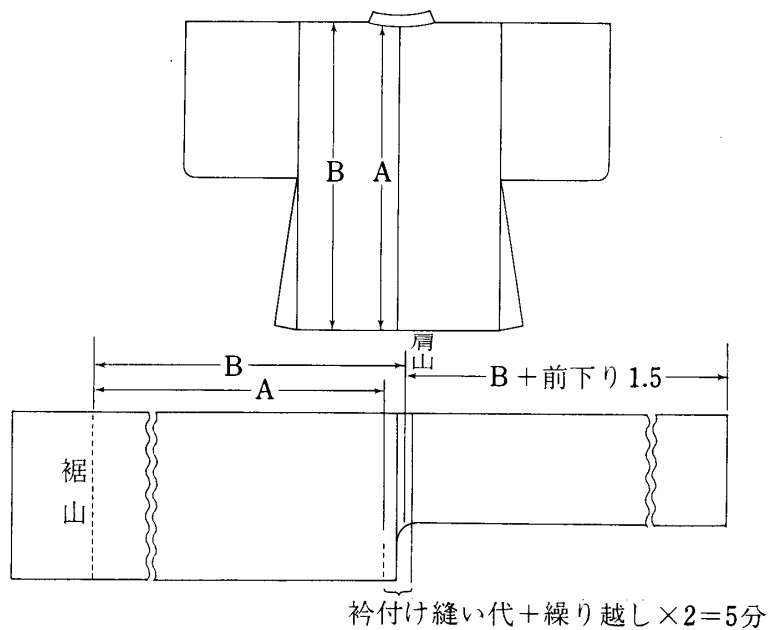


図6 羽織の身たけの規定と前下り5分の配分

入してある。これでは出来上りがどれ程になるのか不明である。羽織たけ2尺6寸といえ、一定の裾縫い代を引いたものであるという約束ごと、あるいは常識のようなものがあつたのか。この点ひとえ羽織及び通し裏羽織は前後共、裾の縫い代を要するため、指定の身たけより短かく仕上がる。また裾折り返し羽織と裾わな無双羽織の場合、前裾のみ縫い代を必要とし、後裾には不要であることから後身頃だけは指示寸法に仕立てることができるが前後の差は減少する。

身たけに関連して羽織の前下りの緩急は形の上で重要な要素の一つである。また裁ち図における前後身たけの差は、単に前下りだけでなく、肩の繰り越しや前裾の縫い代等に関連していることもあるので、単純に見過すことのできない寸法である。

万金産業袋では裁ち方図に寸法の記入が全然ない上に、前下りに関係する記事は皆無である。

絹布裁要には初出の裁ち図に前下り1寸5分と記されており(図2—d)、実際に裁ち図でもすべて1寸5分である。

裁縫早手引では29丁に出ている折り積りの図の説明文に前下り2寸とあり、実際の裁ち合せ図でも4例を除いて他はすべて2寸である。

さて、出来上りの前下りは、明治10年前後の資料でみる限り男物1寸2分ないし1寸、女物1寸が一般である。

裁つ時に前後身たけの差を、例えば1寸5分にしたとしても、ひとえ羽織と通し裏羽織の場合は前後とも裾を縫うので、前下りを1寸5分に仕上げるができる。ところが、後裾がわなの羽織では裾を縫うのは前だけであるから、1寸5分の差をつけても前下りは縫い代分だけ少なくなる。例えば前下り先の縫い代を1分とし、きせを5厘かければ前下りは1寸3分5厘となり、

指定の寸法1寸5分に仕立てることができない。

裁本は裁ち方のみの手引き書であって、実際の技術的なことは直接師匠から弟子へ伝授したのが実情であったから、どのように仕立てたものか手がかりの発見は今となっては難しい。

永年の仕立職人を養成してこられた故興津佳平氏の談話の中に、江戸時代の男羽織は繰り越しがなく、そのために後へ引かれるのを補うために前下りも多かったという内容があった。今回用いた裁本のうち、古い方、絹布裁要の前下りは1寸5分、それから40年後の裁縫早手引では2寸ということについては、次の仮説を設けてみた。

(仮説1) 長羽織の流行によって前下りが多くなった。

江戸編年事典によれば、安永年間(1771~1784)の項に「明和(1766~71)の頃までは蝙蝠羽織とて 丈二尺一寸にして至って短きはをり 武家町人とも着す 安永年中より追々長くなり 寛政(1789~1801)の中頃は膝の下に至る 丈二尺七八寸 前二三寸下りとなるを着す 文化(1804~1818)の末よりまた短きを用ひ 坐しても折返らず 立つときは膝より上にとどまる 襟幅も一寸余にして下りなきを用ゆ(室歴現来集)」とある。裁縫早手引の刊行されたのは享和3年(1803)であるから、長羽織の流行が定着したかに見えた時期で、時流に従ったとも考えられる。裁縫早手引では身たけも裁ち切りで2尺8寸が最も多く、2尺7寸台が6例、2尺9寸が3例である。

また絹布裁要の裁ち切り身たけは2尺5寸5分から2尺9寸まで5分間隔に広く分布しており、そのうちわずかに多いのは2尺8寸5分の6例である。羽織たけも裁縫早手引の方が幾分長い方の寸法2尺7寸から9寸に収束しているように思われる。

(仮説2) 羽織にも近代化の傾向が現われたのではなかろうか。

これは、前出の明治10年から13年におよぶ3資料(表1)からさかのぼっての類推であるが、この頃の裁縫書には肩の繰り越し1分が考慮されるようになった。外見の流行と違って、被服の構造的な変化は、かなり年数をかけて着心地をよくするため、また格好よく着るための工夫が積み重ねられた結果である。

一方、羽織のたけは背の衿付け(衿三つ)から裾までの寸法を言うのが一般であった。今日の学校教育では、羽織をたたんだ時の肩山から後裾までとするのが主流であるが、これは昭和の初期からの教育界の傾向で、この方が初心者には理解しやすい。しかし今日でも和裁の指導的立場の人の何人か、また仕立業界では衿付けから裾までの方法を保持している。この考え方では後たけは(羽織たけ+衿付け込み3分+繰り越し1分)となり、前たけは(後たけ+前下り)である。この場合の3分と前後の繰り越し2分、合計5分多く必要になったと考えられる。しかしこのことが説明できるのは裾折り返し羽織の場合だけである。

ついでに言えば、絹布裁要の時代は羽織といえば通し裏で裾は毛抜合わせの作りが主流であったが、裁縫早手引になると裾折り返しの袷羽織が主流になっている。こうなると前裾の毛抜き合

わせが見た目によくないと考えるようになり、折り返しに見えるように1分見返す方法が工夫されたものとする。

以上の繰り越し・衿付け代・前裾の見返し等の条件がからんで、羽織の裁ち切り身たけや前後身たけの差の量が決められる。そして、その処理の仕方については、今日なお裁縫指導者によって種々の方法が説かれている。

Ⅲ ま と め

万金産業袋・絹布裁要・裁縫早手引三種の裁本から羽織の裁ち方の推移を辿ったが、その結果次の諸項を知ることができた。

- 1) ごく一般的であった通し裏羽織が次第に減って、後ろ裾折り返し羽織が普通になった。
- 2) 時代が後になるほど、一巾物（今日の並幅）の裁ち方例が増え、並幅の便利さが好まれるようになった。
- 3) 裁ち方が工夫されて、後になるほど残り布が少なくなっている。
- 4) 衿布の幅が6～6.5寸から一幅に変わりつつある。
- 5) 袖口布を必ず付けることは必要なかったようである。また黒八丈、五日市といった袖口専用^に切売りされた布を用いた可能性が大きい。
- 6) 襦布の形も三角形から柳形、さらに長方形に変わった。裁ち切り巾はかなり広いが、裁縫早手引にはせまくなるきざしが認められる。

明治期に入って刊行される裁縫教授書では必ず男羽織、女羽織の章があるが、江戸期の裁本には羽織に男女の文字がない。羽織は当然男子用であった。延享元年（1744）の婦人の長羽織着用の禁止令を始め度々禁止令が出ているので、女性も羽織を着たことは確かであるが、主に芸伎、踊り子、囲い者といった人が着たもので、いわゆる良家の女子は着ることはなかったという。そのため女物羽織に関する記述が全くないのである。

衣料は度々仕立替えて着用され、消耗するものであるため、200年前の実物に接することは容易ではない。しかし、今後努めて生^{うぶ}な資料を探して毛抜合わせの通し裏の羽織や、繰り越しの有無など、幾つかの推論を確かめたいと考える。

終わりに、先行文献の資料等に便宜をお与えくださった東京家政学院大学図書館に厚くお礼申し上げます。

注

- (1), (2) 参考文献の1), 2), 3), 4)
- (3) 家政学文献集 (正統編) 田中ちた子・田中初夫 渡辺書店 (1971)
- (4) 裁縫独稽古 矢野武一編 明治10年
- (5) 女子生徒裁縫教授書 久保田梁山 明治11年
- (6) 普通裁縫教授書 渡邊辰五郎 明治13年
- (7) 新式裁縫教授書 樋口米子 女子裁縫専門学校 明治25年
- (8) 裁縫道しるべ 岩瀬松子 明治32年
- (9) 参考文献の10)

参考文献

- 1) 近世和裁史の一考察 (その一) 岡野和子 東京家政学院大学 紀要8 (1968)
- 2) 近世和裁史の一考察 (その二) 岡野和子 東京家政学院大学 紀要9 (1969)
- 3) 近世和裁史の一考察 (その三) 岡野和子 東京家政学院大学 紀要11 (1971)
- 4) 18世紀の裁本にみる着尺の推移 祖父江茂登子 埼玉大学教育学部紀要 24巻 (1976)
- 5) 江戸服飾史 金沢康隆 青蛙書房 (1961)
- 6) 江戸編年事典 稲垣史生編 青蛙書房 (1973)
- 7) 三田村鳶魚全集 中央公論社 (1975)
- 8) 江戸町人の研究 西山松之助 (1974)
- 9) 嬉遊笑覧 喜田村信節 成光館 (1933復刻版)
- 10) 和裁の吹きだまり 興津佳平 (1974)